



TITLE:

統計学=社会科学的認識手段論の問題点(二) - ブルガリアの学者の所説をみて -

AUTHOR(S):

大橋, 隆憲

CITATION:

大橋, 隆憲. 統計学=社会科学的認識手段論の問題点(二) - ブルガリアの学者の所説をみて -. 経済論叢 1960, 86(5): 327-346

ISSUE DATE:

1960-11

URL:

<https://doi.org/10.14989/132790>

RIGHT:

經濟論叢

第十六卷 第五號

金融資産の需要……………	中 谷 実	1
所得倍增計画と公共投資(一)……………	島 恭 彦	21
統計学—社会科学的 認識手段論の問題点(二)……………	大 橋 隆 憲	43
「散不足」と「聚不足」(一)……………	桑 田 幸 三	63

昭和三十五年十一月

京都大學經濟學會

統計学——社会科学的認識手段論の問題点(二)

——ブルガリアの学者の所説をみて——

大 橋 隆 憲

二 集団一般に対して

統計学の研究対象についての見解は、大別して、「集団現象」とするものと、「統計方法」とするものの二つになるが、いずれの見解をとるにしても、統計活動もしくは統計方法の対象が集団現象であるとする点については、論者の意見はほぼ一致している。

しかし更に立ち入って、統計方法の対象の定義の表現の仕方をみれば、必ずしも一致しているわけではない。統計学の対象領域を社会現象にかざる論議をとってみても、その対象は、(1)社会経済現象および発展法則である、というだけで、統計対象の特殊性をどう規定するかについて積極的意見を提出していないもの、(2)社会集団現象の(質的側面との不可分関係はもちろんとし)数量的側面とするもの、(3)社会集団現象の規模、水準、テンポ、比例関係、構造、等とさらに立ち入って規定するもの、(4)社会経済生活の矛盾の数量的側面とするもの、等、多様である。¹⁾

Tzonev と Janakieff は、統計対象は上記のうち(2)の社会集団現象の数量的側面であるとする見解にちかいが、彼等は「社会」の枠をはずして「集団」を論理的に一般化し、認識論の次元において「集団」を「個体」との関係で問題とする点に特色がある。以下まず Tzonev の所論からみる。

Tzonev は一九四八年のソヴェト統計学論争の確認事項たる「統計における理論の実践からの遊離」を克服する目的をもって、彼の第一論文「弁証法と統計方法²⁾」を書いた。彼によれば、統計において理論が実践から遊離する傾向を生ぜしめた主要な原因は、統計方法の本質についての一面的な誤った見解が統計学文献にひろまっているからである、とする。彼は、そうした見解を次のごとく指摘し批判する。すなわち、「大部分の論者は、統計的認識の本質の問題を一般的、認識論の枠外で説明しようと試みている。彼等は統計的方法の論理的本質を表現せんとして、あるものはモノグラフィックな統計利用だけを考えており (A.A. Tchouprov 等、一般に自然統計家)、あるものはイデオグラフィックな利用を考えており (ブルガリアの統計家 D. Michailow 等、一般に社会的事実を研究する統計家)、あるものは記述的な統計利用を考えており (Flaskämper)」そしてあるものは因果律や因果関係の問題にたいする統計利用を考えている (Winkler, Kaufmann, 等)」(p. 33-34) と。彼は統計理論家の間におけるこうした意見の相異が、ますます統計理論を実務から遊離せしめる傾向を強めること、この傾向を克服するためには統計方法の理論的本質を明かにせねばならぬこと、を論証しようとする。

彼は旧来の論者を次のごとく批判する。すなわち「理論家は、認識過程の種々の局面を結びつける諸関係に注目しないで、つまり全体をみないで、『統計方法』をあるときはその部分のあるものに、また、あるときはその部分の他のものに(ノモグラフィックまたはイデオグラフィックに、記述的またはブラグマティックに)矮小化してし

まう。まさにここに危機の原因がかくされている。なぜならば、全体をみないばいいには、構成部分の統一を保持する近接作用を失ってしまうからである」(p. 36)と。かくして彼は、統計方法を単に認識の弁証法的発展におけるいろいろのモメントの表示としてだけでなく、認識全体におけるすべてのモメントの表示として捉えることを主張する。彼はこうした考え方に立って、「一般的統計概念の全装備を再検討し、その現実的基礎を明かにし、生命のないものはすべて放棄し、実践における適用を唯一の能力判定基準として、統計的全装備を完全に再構成しなすこと」(p. 36)を提案する。

彼の構想によれば、このようにしてはじめて統計理論の実践からの遊離が克服されるのであるが、この統計的全装備を再構成するには、まずその基礎となる考え方を確定しておかねばならぬ。それが彼の第二論文「統計方法の論理的基礎」における課題であった。この「統計方法の論理的基礎」³⁾において Tzonev の集団論はじめて明白に定式化された。

「Tzonev によれば、統計方法の論理的基礎を研究するに当ってその根底におかるべきは、レーニンの認識にかんする古典的规定であるという。それはつまり「生き生きとした観察から抽象的思惟へ、そしてそこから実践へ、——これが真理の認識の、客観的現実の認識の、弁証法的道程である」というレーニンの命題に立脚せねばならぬ、という。そして彼は、統計の方法は上記の認識過程の個々のモメントをもっているだけでなく、認識過程の全体におけるすべてのモメントをもっていねばならぬ、と主張する。彼はこうした一般的認識方法としての統計方法を主張するが、しからは統計方法の特殊性はどこにあるかが問題となる。これに答えるのが彼の monotypische und statistische Form 論である。

「Zonev」によれば、統計方法の特殊性は、帰納法や演繹法といった手続様式と並置しても、また対置しても、そうした非数字的なものでは規定しえない、という。彼は「統計的研究方法とは一般に、個々の事物や事例を、集団に総括し、適切な集団特性値を計算して、統一的に特色づけること、と考えている。このことから明かに、統計方法の本当の対立物は、事物や事例を、統計方法とは反対に、個別的に相互に分離して捉え研究する方法である」とし、「事物を個別的に考察する研究様式を monotypische Forschungsweise と名づけ」(p. 27) statistische Forschungsweise に対置させる。そして、この対置を正しい次元に位置づけることによって、理論統計学にきわめて有意義な結論を導くことができる、としている。その結論を導く前に彼は、この二つの研究様式を帰納法と演繹法と組み合せて分析してみせるが、ここでは主として monotypische Form と statistische Form の関係だけについて彼の主張をみるにとどめる。

「Zonev」によれば、認識過程の統計的形態と個別的形態とは相互に異ると前提せねばならぬことはいうまでもないが、しかし両者は相互に移行しあうものであるから、それらを形而上学的にきり離して考察すべきではない、と主張する。そして、その論証として、彼は次のごとくのべる。すなわち、「若干の事情の下では一方は他方に移行し、他方にかわる。認識過程の単純な（個別的）形態は統計的形態の特殊な部分的な場合とみなしうる。統計的形態は、非本質的な要因の影響がゼロに近づき（ $\rightarrow 0$ ）、統計集団内の事例数が1に近づくと（ $N \rightarrow 1$ ）ならば、個別的形態に移行する」(S. 26) 云々。

認識過程の統計的形態と個別的形態との関係についてはそれらを共に、帰納と演繹の組み合わせの特殊形態として捉えるが、要するに彼の考え方は、次のごとく要約することができよう。すなわち彼は、(A)統計的形態について二

つのばあいを考える。(1)その構成要素(単位)のもつ(質的および量的)標識が多様であるような集団($a \wedge b$ $N \vee 1$)、(2)その構成要素のもつ標識が斉一であるような集団($a = b$ $N \geq 1$)、(3)個別的形態については、(3)その構成要素がもともと個別的、非集団的に捉えられる研究様式をさすのであるから、集団それ自体も、集団要素としての差異性も、ともに問題にならな($a = 0, N = 1$)。

このように考える彼は、「帰納と演繹の個別的形態を、統計的形態の一種とみなし、通例の統計的形態の特別の場合」とし、また逆に、「統計的研究形態は、より高い段階に高められた個別研究形態を示す」(s. 29)とし、この二つの研究形態は同一の一般論理的基礎の上にあるものと主張する。

このように主張したばあい、統計方法が特殊的方法として存立しうる論理的な基礎はあるのかないのか、要するにどのようなことになるのか、という疑問が生ずる。これにたいして Tzonev は次のごとく答える。すなわち、「統計方法は特殊的方法として存在しないし、また、存在し得るものではない。それはちょうど『個別的方法』(Monotypische Methode)が、帰納法と演繹法のほかに存在しないし、また、存在し得ないとまったく同じである。ただし個別的形態なるものは、すべての研究方法の、また、おのおの研究方法の、通例の現象形態をなすものだからである」(s. 30)と。

Tzonev はかくのごとく統計方法が帰納法と演繹法のほかに、特殊的方法として存在し、また、存在しうることをみとめない。彼は統計方法が「集団」を基礎とするからと云って、「個体」を基礎とするばあいと特殊的に区別さるべき考え方をとる必要はないとする。このような考え方を彼は一般方法論の立場(一般統計方法論の立場より更に広い立場)と呼んでいるが、彼によれば一般方法論の立場に立つてこそ、統計方法は普通の方法以上に意味深

いものとして、つまり、統計的形態の方法論的全体として、認識過程に対する一つの他の呼称に値するものとして捉えうるという。そして彼は、個別的方法についても同様な事態を認めている。

彼によれば、認識過程における個々の方法論的諸契機の組み合わせの形態により、帰納的あるいは演繹的研究方法、実験的あるいは純思考的研究方法、歴史的あるいは比較的研究方法があらわれるが、これらの諸方法は常に、数字的土台をひろげ、適当な総括をほどこすならば、いつでも統計的形態にかえられる、という。

以上のごとく Tzonev はその第一および第二論文の時期においては、E. Strnad と F. Eggermayr が指摘するように、論理学的次元の一般方法論の立場において統計方法を問題にし、統計方法の内的本質にかんするかぎり特殊的方法としての独自性を認めないが、その外的形態にかんて統計的形態を認める。しかし統計的形態を認めるといっても、それは個別的形態と同一の論理的基礎の上で、条件によっては個別的形態に移行しうるところの固定的でない柔軟な形態として認めるのである。Tzonev による統計方法の認め方と位地づけは、このような次元におけるものであった。

Janakieff のほうは、この Tzonev の一般方法論の立場を出発点におき、その用語を継承しているが、統計方法を、単に、個々の事物や事例を、集団に総括し、適切な集団特性値を計算して統一的に特色づける方法過程の全体とだけは考えていない。Janakieff はそうした方法過程を必然ならしめる対象側の契機を Tzonev 以上に考慮に入れようとしている。この点において Janakieff の集団観は Tzonev のそれにくらべ客観的集団へ、より近く接近しているといえることができる。

三 客観的集団に対して

Janakief の集団論は、彼の論文「理論統計、統計方法および数学」に最もよくあらわれている。彼はこの論文で(1)統計と科学的研究、(2)一般統計理論、経済統計論、部門統計論の相互関係、(3)統計理論と数学、を問題とするが、彼の集団論は、(1)「統計と科学的研究」においてもつとも明白に定式化されている。これによって彼の集団論をみるにおおよそ次のごとくである。

彼によれば、本来は統一的地方であるところの認識過程は、いろいろな側面についていろいろな見方ができるが、理論統計学にとってきわめて重要な区別は、認識の二つの基本的な形態すなわち *monotypische Form* と *statische Form* を区別することであるとし、この二つの形態を次のごとく規定している。

「統一的認識過程は二つの基本的形態に区別される。(a)単純もしくは個別的形態—これは、個々の(切り離された)事実から出発するばあい、あるいは、個々の事実もしくは若干の事実(切り離されていて、統計的総体とは考えられない事実)の記述と説明へ移行するばあい、である。(b)統計的もしくは展開的形態—これは、個々の事実に基づいて、一般化が行なわれるのではなく、諸現象の総体(もしくは、一定の関係において同種であるような一連の諸現象の総体)およびそれらに共通な集団性の総体に基づいて一般化が行われるばあい、あるいは、事実の復合体およびその集団性の記述と説明へ移行するばあい、である。」(S. 867-868)と。

Janakief もこの両形態の関係を、観察された場合の数(n/N)と非本質的諸要因の作用(ϕ/N)の組み合わせ関係として考えている。すなわち彼も「zonev」と同じく、「認識過程の個別的形態は統計的形態の一つの特殊のば

あいであつて、場合の数 n が一に等しく、非本質的要因の作用（それは標準偏差 σ によつてあらわされる）がゼロに等しいばあい、あるいは同じことであるが、すべての非本質的要因が本質的要因とみなされるばあいに生ずる」(s. 863)としている。以上のかぎり Janakieff のいうところは Tzonev の所論と異なるところはなし。

右のごとく Tzonev-Janakieff は、帰納的結論の強さを、観察された事例の数または場合の数に依存せしめる考え方をとっているが、そうした考え方をとりうるのは、いわゆる単純枚举による不完全帰納のばあいであつて、科学的帰納はそうした度数に依存するよりも、事例または場合の研究の綿密さと全面性に依存している。もちろん事例や場合の数が科学的帰納によつて重要な意味をもつばあいのあることは否定しえないが、Tzonev-Janakieff のように、統計方法の論理的根底を専ら「度数」におく量的思考だけでよいかどうか、問題があるう。

Janakieff の考え方が Tzonev と異つてくるのは、数値集団がどのように規定されるかの問題に立ち入つたばあいにおいてである。Tzonev はその問題を主として思考様式の問題として扱っていたが、Janakieff は思考様式の問題を客観的に存在する事実の集団にかかわらしめて問題にしようとする。以下この問題についての Janakieff の考え方を前掲論文の(3)「統計理論と数学」によつてみることにしたい。

Janakieff によれば、数学者の課題と理論統計家の課題は異つていながらもかわらず、ブルジュア理論家は、理論統計学を数学の一部門として特徴づけているという。そして理論統計学と数学の区別の正しい説明は、マルクス主義的観点に立つばあいにのみ可能だとして、次のごとくのべている。すなわち、「数学はその諸概念を帰納的な仕方によつて基礎づけるものではない。それは諸概念を、たとえば算術平均や標準偏差等を、すでに与えられた定義として、その質的な内容を特別に帰納的に基礎づけることはせずに採用し、直接的に形式的演算的にその諸特徴

と数量的諸關係を研究する。数学は指標の一般数理的特性を抽象物の一体系として、適用限界を度外視して考察する。数学は命題変形の規則に基づき、真なる命題から新しい新なる命題に到達しうるが、絶えず直接的に經驗に照してみることを必要としない。数学は指標概念の基礎づけを科学的帰納によつて与えることを必要としない。理論としての数学は、統計指標として与えられた概念の具体的認識内容には直接的な関心はない。…数学は他の実質的理論科学（統計理論をもふくめて）のごとく、自己の用いる概念につき、それが現存する事象を正しく反映しているかどうかという、その物質的本質と認識内容の帰納的根拠を問題としない。」(S. 875)

「理論統計家はこれに反し、定義された指標概念の物質的内容とその本質を明かにし、科学的に基礎づけねばならない。彼は、いかなる場合に当該指標が、一定の事象の正しい把握に適用されうるか、を調べねばならぬ。彼は、それらの指標概念がどの範囲の事象と諸条件に対して適用可能かを証明せねばならぬ。彼は常に直接的に、經驗に照して見る必要がある、また、指標の数理的性質と關係および計算方法を考察せねばならぬ。理論統計家は、彼の課題を理論数学者のそれと取りちがえてはならないし、また、本来的に異つた概念規定をもつ諸指標間に、たんに数理的な性質や關係だけについての公理を押し立ててはならない」(S. 876)と、Janakieff は、数学者と理論統計家の課題と関心の差異を強調する。主体側の課題や関心にかんする一般論としては、以上のかぎり異論のないところであるが、統計学における集団論を明確に意識し、客観的集団という客体側の問題に対する考え方を明かにするためには、なお多くの問題がある。たとえば、客観的集団が集合論における集合や、確率論における集団と、どこでどのように異っているのか、差異の生ずる分歧点を具体的に明示することが必要であろう。ところが Janakieff のばあい、「集合」との差異については全く閑説するところがないし、「確率集団」については次のごとく述べてい

るにすぎない。すなわち「一般統計理論は科学として、いわゆる『ストカステックな合法則性』をも問題とする。ストカステックな合法則性というばあい、ひとは偶然的（非本質的）諸要因の影響の程度を、存在する諸条件（観察された場合の数、等）にかかわらしめて規定する法則と解する。したがって『大数法則』は物質的現実の客観的反映である。『ストカステックな合法則性』は統計的形態における科学的帰納によって研究され基礎づけられる。したがって一般統計理論は、これらの合法則性が、物質的現実たる集団的事象の量的出現の一般的特色の反映であるかぎり、その一般的な客観的に作用する『ストカステックな合法則性』の認識を説明し明確にする課題をもつ」（純粋数学においてはストカステックな合法則性は組み合せ論の領域における一定の諸関係であるにすぎない。）（S. 871）と。これでは依然として、一般的・抽象論の範囲をいでない論議という不満を否定しえないであろう。

四 社会的集団に対して

Tzonev と Janakieff は統計学の対象領域を、個別的形態と対立する統計的形態において捉えるのであるが、他方、彼等が弁証法的唯物論の観点をとるとするかぎり、自然現象と社会現象とを質的に異なるものとして捉えねばならぬ。ここにおいて当然に彼等は、自然的集団と社会的集団、それらの統計方法に対する関係、を問題とせねばならぬ筈である。

Tzonev は彼の第三論文「統計理論の対象について」においては、社会的集団それ自体について内容的なことはほとんどのべていない。第四論文「統計理論の研究対象と形式主義の克服」において、彼は社会的集団について、わずかに次のごとき指摘をしている。すなわち「ある科学の領域では、認識の展開は、その科学が一般的に発展し

た後期の歴史的段階で生ずる。展開的または統計的研究様式は、その科学にとって最初は、外来的な作業様式と感ぜられる。たとえば中世において、具体的な歴史的・地理的集団現象としての社会的集団現象 (Gesellschaftliche Massenerscheinungen) に対する科学的関心が生じたばあい、そこから特殊な地理的・歴史的科学的すなわち統計学が発展した。そしてそれは、一九世紀になってはじめて、他の歴史的・地理的諸科学が社会の具体的な集団現象の研究に基づいて成果をおさめたときに、ようやく自らの研究をはじめた」(S. 88) と。

これによってみれば、'Tzonev' もまた、統計理論の対象として「社会的集団」を考えていることは明かであるが、しかし、'Tzonev' のばあい今迄のところ、社会的集団それ自体に立ち入った一般的考察はほとんどみられない。彼は第三論文においても第四論文においても、一般統計理論の対象を問題としており、経済統計理論のばあいは指標概念にかかわらずして「指標概念に反映される経済的現実の特質」(S. 86.) と規定しているが、彼の一般統計理論の対象規定は、社会経済的諸部門の特殊統計理論の対象の総括としての意味をもつにとどまる。つまり自然科学の諸部門の特殊統計理論の対象 (自然的集団) との質的区別にはならぬ論及するところがない。彼は以前には一般方法論の立場において、抽象から具体へ、一般から特殊へ、の方向において統計方法の特殊性を規定しようとしていたが、今や彼は、逆の方向をとり、特殊統計理論の対象からその総括として一般統計理論の対象を問題としようとしている。そして「社会的集団」は彼のばあい、両方向の結び目に位地し、彼の理論にとって決定的な重要性をもつにもかかわらず、彼はこれについて今までのところ、立ち入った意見はほとんどのべていない。

Janakieff のばあい、社会的集団についての考察はかなり進展をみせている。彼はその論文「理論統計、統計方法と数学」の (2) 「一般統計理論、経済統計論、部門統計論の相互関係」において、「一般統計理論の主要課題は、統計

指標概念を作成し、基礎づけることであるとし、統計指標は、集団現象の一定の特徴とその量的出現形態を反映せねばならぬとするが、結局のところ、「一般統計理論の対象は集団的に出現する現象と過程である」(S. 26)と規定している。しかし彼によれば、「集団的に出現する現象と過程」と云つても、そこには自然現象は含まれず、社会的集団現象に限定さるべきだとする。その理由とするところは次のごとくである。

「一般統計理論は、経済統計と社会経済的部門統計の諸経験を一般化するものであるから、経済学部の教育で現在採用されているその内容は、社会経済的部門統計の発展によって規定される。自然界における集団現象は、社会経済的現象とは本質的にことなつた特殊な性質と特殊な量的出現形態をもつことが多い。自然界における諸現象を社会における諸現象と等置することは、科学の発展と統計学の本質にとって有害無益である。したがって一般統計理論は社会経済統計理論なのである。社会経済統計理論は、たんに社会現象を自然現象から区別するだけでなく、社会現象の一定のタイプを他の社会現象から明確に区別せねばならぬ。たとえば裁判統計の領域における現象は、人口統計や保健統計の領域における現象とは区別されねばならぬ。同様なことは、交通統計の領域の現象に対してもあてはまるので、それは農業統計の領域の現象と区別されねばならぬ。しかし、これらすべての諸現象の量的出現には、一般統計理論が一般化しうるところの一般的特徴がある」(S. 87-87)と云つてゐる。

彼はさらに、この主張についての註で、「われわれが経済高等学校で教えている一般統計理論は事実上、社会経済統計の一般理論であるが、このように主張するからと云つて、自然現象の研究に際して統計の形態の帰納法と演繹法を適用しえない、というのではない。全くその反対である。しかし、自然界における集団現象の量的出現の諸形態とその生起する諸条件は、社会のそれと本質的に異なるばかりが多い。したがって社会経済統計の一般理論が、

生物統計や天文統計等々の諸経験を一般化することは、正しくもないし、また、必要でもない」(S. 871) といふる。

Janakieff の主張は以上のかぎり、結局は現行の教授科目としての一般統計理論は社会的集団現象を対象としているということに尽き、その社会的集団現象は自然的集団現象と多くのばあい本質的な差異があるということを指摘するにとどまり、社会的集団現象と自然的集団現象の差異の内容的な本質の規定には立ち入っていない。Janakieff は、生物統計や天文統計の経験の一般化を、社会経済統計理論が行うのは正しくもないし必要でもないといふが、もちろん社会経済統計理論そのものと同一平面での、ミソ・クソ合計的な一般化は無意味であるが、実験動物集団や天体集団等々の自然的集団と社会的集団との本質的諸規定の差異が具体的に明かにされてこそ、社会経済統計理論の一般理論的基礎は、より明確なものとなる、とわたくしは考える。

五 経済的集団に対して

Trzonev と Janakieff は結局において一般統計理論の対象を社会的集団現象と規定するが、それから当然に、言葉の上では経済統計理論の対象は経済的集団現象ということになる。しかし、すでに指摘したごとく、現実の社会的集団現象そのものの諸規定が必ずしも明白ではなく、統計学における社会的集団現象の一般的諸規定は、その現実の社会集団現象のいかなる側面を放棄し、いかなる側面を残留せしめているかは、かならずしも明白でない。例えば統計学でのそれが、社会学で問題とする社会的集団と、いかなる側面でのように交錯しているか、等の諸点もほとんど明かにされていない。このような一般的諸規定のあいまいさの中にあって、経済的集団現象の特質、形

態、意義を一举に明かにしようとしても、無理な企てといわざるをえない。がとにかく、Tzonev-Janakieff はいちおうは経済的集団現象について言及している。以下それを見ることによって、それがいかに抽象論議の域を脱していぬかを確かめることにしたい。

Tzonev は彼の第四論文「統計理論—研究対象と形式主義の克服」において、統計的研究様式が理論的経済諸科学の領域に導入されて、特殊統計諸学科、たとえば工業統計論、農業統計論、等が成立する、という。そして「それらの諸科学は、経済諸科学の統計化過程を援助し、部分的には自らも統計化過程を進めることによって、一方の統計実務と他方の理論的経済諸科学とを媒介する歴史的課題をもっている。しかし経済諸科学の概念が、経済的集団現象の把握に適するようになればなるほど、それだけ特殊理論統計学の内容は、対象的な経済諸科学へ編入されてゆく」(S. 38)と述べている。

次いで彼は特殊経済統計論の対象と方法について「このことから当然に生ずる結論は、特殊経済統計論は対応する経済諸科学と同一の対象を研究することである。そしてそれらはまた、同一の認識方法をつまみ、それぞれのばあい、統計化された経済的概念を作りあげることを目ざす帰納的認識の方法を使用せねばならぬ」(S. 39)と述べている。Tzonev のばあい、特殊経済統計論も経済諸科学も、同じく経済的集団現象を研究対象とするわけであるが、前者は後者の統計化過程（理論的概念の統計化とは統計指標概念の設定を意味し、必ずしも統計指標定式の確定までを意味しない）の援助を行う漸定的な部門にすぎないとみる。しかし、そのようにみただけで云って、特殊経済統計論はいかなる形態の経済的集団現象を問題とし、また、その経済的集団現象のいかなる側面を放棄し、いかなる側面をとりあげているかを明確にする課題からまぬがれうるものではない。しかるにこの問題は、

「Zonev」においてはほとんど論及されていない。

Janakieff もその論文「經濟統計理論の意義と対象」において、統計諸科学における形式主義と効果的に対決するために、理論統計諸学科の対象と方法を正確に規定する必要がある (S. 66, 邦訳一七頁) と強調するが、彼はたびたび經濟統計学の研究対象を「經濟的現実」 (Oekonomische Wirklichkeit) と規定し、必ずしも「集團概念」を不可欠のものとせぬかのごとき表現をしている。しかし、オストロヴィ・チャノフの統計理論の対象の定式化を正確で不充分と批判した後の、彼の定式化は次のごとくなっている。すなわち「社會主義的經濟統計学の対象は、社會主義的拡大再生産の具体的・集團的な過程と現象および合法則性である。実践としてのその主要課題は、これらの現象と過程を、統計指標概念と統計方法を科学的に適用して、具体的・数字的に捉えることである。」 (S. 68, 邦訳一八九頁) と。

Janakieff によれば、經濟統計学の研究対象は、具体的・集團的な經濟現象と經濟過程 (konkreten, massenhaften Oekonomischen Erscheinungen und Prozesse) である。彼はさらに、その量的側面が統計学にとって放棄しえない側面であることを述べる。すなわち、「經濟統計学の理論は、科学的に基礎づけられた統計指標を作るために、集團的な、具体的に存在する經濟現象と經濟過程を研究する。經濟統計学の理論は、これらの現象や過程が量的にあらわれる具体的形態との関連において、それらの現象や過程は、絶対数、比例数、平均値、指数、相關係数、等の形で表現されうる。それらは、經濟的な現象と過程の大きさと量的關係の客觀的に存在する諸形態におおて表現される。」 (S. 64, 邦訳一九頁) と。そして結局は「經濟統計理論の主要内容 (Hauptinhalt) は統計指標 (statistische Kennzeiffern) である」 (S. 65, 邦訳一九頁) ということになって、問題は指標概念に移る。そして、

対象たる経済的集団現象そのものは、その重要意義を強調されるが、立ち入った理論的分析がおこなわれずに終わる。

む す び

経済統計理論の対象と内容にかんする Tzonev と Janakielf の見解は、特殊統計理論の将来性について差異はあるが、その他の点においてはほぼ一致している。そこで両者の見解を要約し、それに対する E. Strnad の批判と、「統計実務」誌編集部の E. Strnad に対する反批判をみ、私見を附加してむすびとする。

Tzonev は、すでにのべたごとく、一九五〇年前後の第一および第二論文においては、統計方法論としての統計学を主張していたが、一九五七年の第三および第四論文では帰納科学としての一般統計理論を主張するに至った。彼の主張で注目される点は、一般統計理論は基礎たる経済諸科学の成熟によって変化はうけぬが、特殊統計理論の理論部分は、経済学の成熟にともない経済学に次第に吸収される、とする点である。この特殊統計理論の暫定的な性格についての考え方に Janakielf は反対するが、その他の考えは大体において Janakielf に継承されている。そこで以下、主として Janakielf の経済学と経済統計学との関係についての見解をみることにする。

Janakielf によれば、「経済学と経済統計学は、経済的現実を研究対象とするが、この現実をちがった側面から研究する」という。つまり「経済学は社会的生産関係、すなわち、人間の経済的諸関係の発展を研究する。経済学は人間社会の物質的財貨の生産と分配を支配する諸法則を研究する。」これに対して「経済統計理論は、集団的な経済現象過程を研究する。もちろんそれは、その特殊な課題に応じて、その数量的・集団的出現の具体的な形態との

関連において研究する。この研究の課題は、具体的、集団的な経済現象過程を把握研究しうるところの、理論的経済統計的な概念・カテゴリー・指標の体系を誘導し、基礎づけ、組立てることである。」(S. 682 邦訳二〇頁)と主張する。

このような主張に対して、E. Strnad は、統計理論の内容を概念・カテゴリー・指標というような「現実反映のための手段」に還元してしまうことは正しくない、統計学の課題は指標概念を研究することにあるのではなく、現実の事実を研究することにある、と反対する。この E. Strnad のいうところにすこしく立ち入ってみるならば、それは次のごとくである。すなわち、彼は、一九五四年のソヴェト統計学論争のオストロヴィチャノフ総括には直ちに受け入れにくい二三の定式化がある、という。その中でも、統計学を「社会的集団現象の量的側面」を研究する学問だとする定式化は、ブルジョア統計学者の間に広まっている俗見と区別しえないものだ、と主張する。そして E. Strnad は Janakieff が統計学の特殊性を単なる量的研究に限定しない点に賛意を表わしているが、彼は、Janakieff が統計学を帰納哲学に還元していることに反対する。Strnad の主張によれば、経済学は理論的概念と理論的定式によって経済法則を研究するに對し、統計学は経験的概念と経験的定式によって経済事実を研究するものである、(S. 1218.) という。ところが、Janakieff は Tzonev と同様に、経済統計理論の内容を「概念と指標」に還元し、統計学の対象から、「具体的反映のための手段」だけを残留させている、つまり、統計資料の中に示される客観的現象自体の反映ではなく、反映のための「手段」だけを、残留させている、それは結局、統計学＝認識手段論である、と Strnad は Tzonev-Janakieff を批判する。

Strnad のこのような批判に對し、「統計実務」誌編集部は「Strnad 氏のいかさまトリック」¹⁰⁾という反批判をお

となった。それによれば Strnad の主張には三つのトリックがあるとされている。以下のごとくである。

第一のトリックは、一九五四年のモスコウ会議の結論に基づいて、統計学を事実研究であると称している点である。もともと事実研究をせぬ科学などありえないことで、個々の科学から事実研究を引き離すことは誤りであり、Strnad はオストロヴィ・チャノフの定義から、都合のいい表現を勝手にとり出して、それによってソヴェトの定義のマルクス・レーニン主義的内容を改変している、というのである。

第二のトリックは、統計の領域ほどブルジョア的伝統が根づよく残っている領域はない、とはじめに述べておいて、Strnad の主張に合わぬものをすべて、ブルジョア的伝統をもつ見解ということにしてしまう点である。Strnad は実際の統計的研究と統計学の理論内容とを混同している。マルクス主義の論理にあっても、理論としての科学は、一定の概念・カテゴリー・相互関係および合法則性を内容とする。統計学も事態は同じであり、それによって、客観的に存在する社会生活の現象と過程を反映する。この理が Strnad にはわかっていない、というのである。

内容的には同じことであるが、編集部は次の二点を指摘している。すなわち、誤解の余地のないほど明かに、Janakieff は統計学の対象は経済的現実の具体的な現象・過程であり、それらはその出現の量的諸形態と不可分に考察されねばならぬ、と書いているのに、Strnad は、Janakieff が統計学の対象は客観的現実ではなく、指標と概念であると主張しているように書いている。これは Strnad の誤りである、と。また、Janakieff は統計学での帰納と演繹に弁証法を適用せねばならぬと強調しているのに、彼が弁証法を無視しているかのごとく Strnad は書いているが、これも Strnad の誤りである、と Janakieff を擁護している。

第三のトリックは、Strnad は、統計学の対象がテーマであると声高に語りながら、統計学の対象自体を具体的

に定義する道からうまい具合にそれてしまふ点である。彼はもちろん、統計学は事実研究だと主張するが、理論体系としての統計学 (Komplex Statistik) の存在を認めない。彼は「統計科学」 (Statistische Wissenschaft) という言葉と「統計理論」 (Theorie der Statistik) という言葉をカッユツきで用い、これらの諸概念は彼にとっては、ひとつのフィクシオンにすぎないということを強調しようとする。そして結局、Srnad は統計学を事実研究の方法とし、またそう呼んで、実ははじめから統計学の対象についての論議の道をふさいでしまっている、というのである。つまり Srnad は統計学＝方法論者だというのである。

以上が「統計実務」誌編集部 (E. Srnad) に対する反批判の要点であるが、最後につけ加えられている「空虚な論議ではなく、一歩前進を!!」によって、一九五四年のモスコー統計会議の結論に対する「統計実務」誌編集部の態度をみておくことにしたい。それは次のごとくのとっている。

「統計家は、理論家も実務家も、自らの仕事を前進させ改良しようとのぞむならば、モスコー会議で与えられた定義に基づいて活動し、この定義をさらに発展させ具体化することを課題とせねばならない。Srnad が代表するような邪見の宣伝は、理論と実践のいつそうの発展にとって否定的に作用するだけである。統計学が実質科学であるという事実を否認することは、統計実務からその基礎をうばい、統計実務を単なる経験主義と形式主義の道へ追いやることである。」 (S. 58) と。

統計家の理論および実際の活動の出発点と課題を、「統計実務」誌編集部は以上のごとく捉えているが、わたくしは統計学＝実質科学説の絶対化には組しえない。オストロヴィチャノフ総括が、社会主義統計理論の発展にとってきわめて重要な起点であることを認めるが、それを直ちに統計学＝実質科学説と定式化しうるか否か、論議は

なお多く残っている。ましてや、反対論を統計学＝方法論ときめつけることによって論議の勝負がついたかのごとく錯覚することは、理論の発展にとっては有害無益である。統計学における一つの観点である集団論の観点からみても、すでに指摘したごとく、統計学の対象理論の具体的内容はほとんど未整理の状態にある。わたくしは、集団論の観点からの問題の整理が、統計学論争の前進のための、当面の理論的課題である、と考える。

- (1) 中国人民大学第七次科学討論会統計部会のおらまし「統計学のいくつかの重要問題についての討論」(計国学統計、一九五九年第九号) (邦訳、安藤次郎訳、経済統計研究会資料)の整理の仕方によつた。
- (2) В. Ст. Цонев, Диалектика и статистически метод, Годишник на Софийския Университет Факултет за стопански и социални науки, том II, 1948-1959. この論文については、主としてその邦文ロシアによつた。
- (3) В. Ст. Цонев, Върху логическите основи на статистическия метод, Годишник Софийския Университет Факултет за стопански и социални науки, том III, 1949-1950. この論文については、主としてその露文および独文ロシアによつた。
- (4) ノーメン「哲学ノート」(邦訳、広重定吉訳、(土)一九五一年刊)七四―一五頁。
- (5) Rumen Janakieff, Theoretische Statistik, statistische Methode und Mathematik, *Wirtschaftswissenschaft*, 1957. Heft 7. S. 866-878.
- (6) V. St. Tzonev, Ueber den Gegenstand der Theorie der Statistik. *Statistische Praxis*, 1957. S. 67-70.
- (7) В. Ст. Цонев, Предметът на теорията на статистиката и преодоляването на Формализма в съдържанието на статистиката. София, 1957. この論文については主として露文および独文ロシアによつた。
- (8) Rumen Janakieff, Bedeutung und Gegenstand der Theorie der Wirtschaftsstatistik. *Wirtschaftswissenschaft*, 1957, Heft 5. S.641-654. (邦訳「国経雑誌」第四三三号、一九五八年二月、所収)。
- (9) Ernst Strnad, Nochmals zum Gegenstand der Statistik, Eine Antwort auf die Konzeption Janakieffs. *Wirtschaftswissenschaft*, 1957. Heft 8. S. 1215-1220.
- (10) Die fragwürdigen Tricks des Herrn Strnad, *Statistische Praxis*, 1958, Heft 3. S. 57-58.